

インターンシップ in メルボルン 2012 私を変えた夏

経営情報学部3年 佐竹 哲生



この夏、オーストラリア・メルボルンにあるハンティングデール(Huntingdale)小学校を40日間にわたり訪れた。多摩大学によるインターンシップ(就業体験)を経験するためである。ハンティングデール小学校はヴィクトリア教育省によりJapanese Immersion Programに選ばれている公立学校。今回の海外インターンシップの目的は語学研修は当然ながら、異国の地に住み、その地域の仕事を通し、より多くの人や文化と関わることだった。メルボルンでは様々な国の文化を感じることができる。ハンティングデール小学校は日本や中国、マレーシア、イギリスなどの子供たちが在籍していた。特に教育の現場ではオーストラリアの文化がとても良く表われており「子供がどのような環境で育ち、大人がどのように働いているのか」を見ることが出来た。

この小学校での私の仕事。それは教師のアシスタントと学内の事務作業だ。ハンティングデール小学校はバイリンガル教育を取り入れており、日本語の授業の他にも、美術や体育では日本語が使われている。このため日本語がわからない子供たちの授業進行のためのサポートや、日本語、英語教育が私の仕事となった。実際に授業に臨むと答えのない想像力を問われる課題が多い。例えば理科の授業では「血液の働きを発表する」という課題が出された。子供たちは3人組みのチームを作り、本やインターネットを活用し発表の作戦を立てる。血液の血小板に焦点を当てた発表や白血球の活躍を実演で発表するなど悩みながらも独創的な表現をしていたのが印象的だった。授業では結果よりもチームでの作業や目標に向けて創造していく過程を大切にしていた。

この小学校では、日本から親子留学している子を除いて、ほとんどが英語を母国語としている。日本語は第二言語として力を入れているため、高学年にもなると日本語を理解し、日常会話程度はこなせる子もいる。実際に休み時間に子供たちが日本語と英語で会話をしている光景を目のあたりにした時は衝撃を受けた。互いの言語を理解し、素直に自分の言葉で話す子供たちの様子はこのバイリンガル教育ならではの風景だろう。

ところである男の子が学校に転校してきた。彼はオーストラリアに



移住したばかりで、日本語はおろか英語も話すことが出来なかった。不安でいっぱいな様子の彼に、英語を身振り手振りを交え教えた。生徒も不安だが、同様に私も不安を抱えていた。それでも彼が始めて自分の名前を英語で書くことが出来た時見せたその喜びの笑顔は今でも忘れることが出来ない。インターンシップを終える頃には、彼はすでにクラスの子供たちの輪に入り楽しげに遊んでいた。子供たちは文化の垣根を越えて友達を作る柔軟な感性を持っている。一方、日本からやってきた第三者としてのコミュニケーションの難しさについても深く考えさせられた出来事だった。

ハンティングデール小学校では全員が仮装をして登校する日や「浦島太郎」劇の発表会(NHKで日本でも放送)、擬似オリンピック大会など多くのイベントが開かれた。もっとも途中でメルボルンの教員達による大規模なストライキによりインターンシップが一日中断したことは予想外だったが。

さて最終日にはヴィクトリア州教育省の方との対談会が催された。日本語や中国語などの語学教育を促進しているオーストラリア政府の教育方針やバイリンガル教育の今後の展開を聞くことができた。それに対し今回のインターンシップで感じたバイリンガル教育の学力・運動力低下問題や留学生活でのカルチャーショックだったことなどについて、お話しすることができた。

初めての海外インターンシップ。最初のうちは語学の壁を感じたが親切な先生方、人懐っこい子供たちと関わる事ができた。すばらしい文化が集まるメルボルンでの生活を通して、いろんな人と話す喜びを感じることができた。このためインターンシップ後半には「英語を話す機会が欲しい」と行動の範囲を広げた。以前の自分ならば考えられないことだ。人との関わりを広げる。これが成長ということなのだろう。

最後に好奇心旺盛な私のわがままを聞き入れて下さり多様な業務機会をつくっていただいたハンティングデール小学校、ICC国際交流委員会、そしてこのような機会を与えて下さった多摩大学に感謝しています。

発見・体験・

気づきませんか?

リサイクル循環の底力

経営情報学部 2年 小菅 慧

この9月八王子市の産業廃棄物処理会社「ハチオウ」にインターンシップ生として2週間参加した。産業廃棄物、とりわけケミカルを扱っている産業廃棄物処理というのはどのような場所で、どのような作業を行っているのか?

初日は新規入場教育ということで機械設備、廃棄物等の危険性の説明と環境整備、工場内のチーム人員、取扱い品目、緊急事態の対処法、産業廃棄物に関しての法令順守、保護具の確認をした。「安全第一」と「きまりを守る」それが産業廃棄物処理施設のルールである。

廃棄物処理というと3Kの職場を想像する人がいるかもしれない。しかし、私の目にした光景はそうではなかった。

自然や人体に影響がある薬品や試薬の移動・分別では、重い容器に薬品が入っている。小分けした薬品などを分別した時は、日常生活では滅多に見ない薬品を扱う。とても産業廃棄物を取扱っている所とは思えない光景であった。産業廃棄物なので、想像する家庭ごみとは異なり、企業の活動で生じた廃棄物である。私たちが通常想像する廃棄物とは異なるのも当然だ。

分別の次が廃棄物処理だ。毎日薬品が入ったポリ容器廃液が運ばれてくるのだが、廃棄依頼時、廃液をまずサンプル検査する。簡易検査なものから蛍光X線分析装置を用いた調査、さらにはICP (Inductively Coupled Plasma) と呼ばれる装置で元素の種類や含有量などが調べられる。この過程でどのような物質なのか明確にした上で、廃液がポンプで吸い上げられ槽に入れられる。そこで酸やアルカリ性、重金属など分かれている廃液を中性にするためにチェック、テストをする。中性になれば下水処理などができるというわけだ。

現在の産業廃棄物処理業界では、廃棄物処理に多くの電気や薬品(資源)を使用する。つまり製品を作るにも多くの資源を使用し、産業廃棄物でも同じく資源を多く使う。この生産と廃棄の循環を守るために、法令を順守しなければならない。そのため、多くの資源を使ってしまう。

そのような環境の中で生活している私たちは、この産業廃棄物の現状を直視しなければならない。社会は廃棄物循環の上に成立していると言っても過言ではないのだから。

中小企業は社員を育てる

経営情報学部 2年 小松原 聖史

今年の8月、TAMA協会首都圏産業活性化協会が大学生・大学院生に向けた成長企業(中堅・

中小・ベンチャー企業)で働くことの魅力を、伝えようと「中小企業の魅力発見ゼミ」を開催した。それに参加してきた。このプログラムでは約半年間かけて、他大生も交えた学生数人が企業を訪問し、社内見学、経営者インタビューを三社行う。その企業訪問を通じて感じた企業の魅力や感想、印象など、グループワークを通じて、魅力レポートとしてまとめ、12月14日開催の最終発表会でプレゼンテーションを行う。

最初に訪れたのは埼玉県入間市にあるカネパッケージ株式会社である。梱包事業で主に緩衝材を開発している企業だ。駅から会社までは車で迎えに来ていただき、部屋へ通されるとすでに人数分の飲み物と会社案内の封筒があり、何かが布の袋に入っていた。気になっていたところ「それ、袋から出してみてください」と言われる。袋から出すと広がり、ポンッと勢いよく、社名と学生それぞれの名前が書いてあるうちわになったのだ。このようにカネパッケージでは、驚きと感動と安心を与えることを社訓としている。環境事業では海外の部署と一緒にマングローブの植林、宴会など社員のコミュニケーションに力を入れており、社員同士のつながりが強いと感じた。



カネパッケージにて

次に訪れたのは東京都八王子市にある株式会社内野製作所だ。歯車を開発、製造しており、1000分の1ミリの精密な歯車を作る研磨技術を持った企業だ。工場内は光が多く取り入れられ、自然の風が吹き込むようになっており、清潔さと快適さが保たれた空間だ。内野社長は「工場らしくない工場を目指していた」という。お昼には全社員が決まった時間に一齐に食堂に集まり健康的でおいしいランチを食べる。社長の意図は、楽しく働き通える職場。「いかに働きやすい職場環境を作り出し、従業員のモチベーションを高く保てるかが重要である」と話す。中小企業の中でこれだけの環境を整えていることはとても驚きだった。



内野製作所にて

三社目は東京都八王子市にある株式会社テージーケーだ。自動車および住宅設備用各種精密制御部品並びに各種機械の開発、設計、製造および販売をしている企業だ。テージーケーでは社員教育に力を入れている。社員のインタビュー

では3人に行った。やりがいを聞いたところ、個人を評価してもらえる点や仕事への責任感を持つことができるというお答えをうかがった。やはり、仕事を任せ、個人で評価してもらえるような環境を整えることが社員を成長させるのであろう。



テージーケーにて

三社の取材訪問を終えて、発見点はなにか? それは、中小企業の魅力については各社それぞれだが、三社とも共通していたのが新人教育をしっかりとできる形になっているところだ。大手企業よりも中小企業は余裕がなく、新人を育てる力がない中で、この三社が社員を育てる力があるということは、目先の利益だけを求めているわけではなく、長く会社を存続する考えが根底にあるからなのだと感じた。このゼミに参加したことで、就職活動における企業の見方が変わり、経営者の話を直に聞いたことは中小企業の力、大企業にない魅力を感じ取れたという点でとても貴重な体験であった。

変わりゆく多摩地域で変わらない故郷

経営情報学部 1年 甲斐 涼子

私の住んでいる多摩市は、多摩ニュータウン計画により都市化され、八王子市、稲城市、町田市とともに開発された場所である。ジブリ作品の「耳をすませば」のモデルになった町、といえば伝わるだろうか。そして、私の通う多摩大学多摩キャンパスは、多摩市の「聖ヶ丘」という場所にある。多摩地域には大学が多いため、地名までは知らない人も多いだろう。聖ヶ丘という名前は公募で決められたのだ。近くに聖蹟記念館があることが由来であるという。

聖ヶ丘もニュータウン計画で開発されたのだが、他の開発地域とは少し雰囲気が違う。比較的一軒家がが多く、主に高齢者が住んでいる。緑が多く、ゆったりとしていて、散歩するのにちょうどいい場所だ。「開発」された地域とは思えないほど落ち着いた。そもそも、多摩ニュータウン開発が始まったのは1960年代のこと。私が生まれるだいぶ前の話なので、「聖ヶ丘のどこが変わったのか」と聞かれても答えられない。違いといえば、小学生のときに遊んでいた公園の遊具が増えたこと、道が綺麗に整備されたこと、街灯が増えたことくらいである。他の開発地域と比べたら、私にはあまり変わっていないように思える。

ところで、聖ヶ丘の名前の由来である聖蹟記念館について、正式名称は、旧多摩聖蹟記念館という。明治天皇がこの場所へ行幸したことを記念して作られた施設である。都立桜ヶ丘公園の中にあり、少し山を登ると現れる。ここへは、小さい頃祖父と散歩したときに寄り、よくオレン

ジューズを飲んだものだ。行幸についての資料などが置いてあったのだろうが、当時の私には理解出来なかった。山の頂上にあるため、緑の中をゆっくり登って、休憩に寄る記念館が大好きだった。19歳になった今、もう一度行ってみたい場所である。

この聖蹟記念館を1930年にこの地に作ったのが、聖ヶ丘の隣にある「連光寺」の地主である、富澤政賢で、後に多摩町長となる。多摩ニュータウンは変わっても、その隣で戦国時代から続く連光寺は、今もそのたたずまいを残している。連光寺、変わらぬ私の故郷である。



聖蹟記念館

ビデオジャーナリストゼミ 発

消えた遊具の向こうに 団地の歴史と夢を見た

経営情報学部 2年 江間 宏路

「アポロの遊具がなくなった」友人からそう聞いて、慌てて行ってみると、たしかに遊具が消えていた。

日野市百草団地にある「アポロ広場」と呼ばれるその小公園は、子どもの頃いつも遊んだ場所だ。そんな思い出のつまった広場の遊具が消えた事に少しショックを受けた。これをきっかけに、多摩地域のコミュニティの変化と子どもの遊び場の行方に関心をかきたてられプロジェクトゼミの取材テーマにしたのだった。「消えた遊具」の背後を取材してみるとコミュニティのあり方を模索する地域の姿が見えてきた。

アポロ広場は真ん中に檜が立っていてそこから滑り台が腕のように伸び、ネットや砂場が配置されて、子どもにとっては冒険心をくすぐられる楽しい「小宇宙」だった。その檜に付いていた遊具が撤去され、今は腕がもがれたような状態になっている。

遊具が取り外されたのは、平成20年度に国交省から出された「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」の「安全基準」を満たしていないという理由によるものだ。当時、あちこちの公園の遊具で事故が起きたことを思い出す。しかし、では何故、檜は残ったのだろうか。「アポロ広場」の遊具の撤去を担当した南多摩管理センターを訪ねた。

「アポロの遊具は国の安全基準に満たない、改修も不可能という事で撤去することになった。しかしアポロの遊具は団地のシンボルなので展望台という形で残す事にした」(担当者の鈴木さん)

百草団地の入り口にあるアポロ広場は、季節の祭、夏の花火大会など、住む人にとって大切な交流の場であり、団地のシンボルとして歴史を刻んできた。広場の遊具をどう残すのかは「団地に住む人たちの思いと歴史をどれだけ残せるか」に通じるといふのだ。

小さな広場のささやかな遊具だが、百草団地という地域コミュニティに対する住人の深い思いを大事にして展望台として生まれ変わった。そして、アポロ広場の北側に新しい遊具を作るプランがあるとのこと。生まれ変わったアポロ広場に子供たちの夢と歓声があふれる日が待ち遠しい。



アポロ広場の遊具

プロジェクトゼミ「メディアを創る」ではビデオ、音声メディアなどの企画、取材、制作に取り組んでいる。情報の「発信者」として誰もがメディアの主役になれる時代の挑戦だ。現在、男7人、女1人の「8人の侍」が奮闘中。夢は大きくビデオジャーナリスト。その取材、制作現場からビビッドなレポートをお届けする。

(経営情報学部 客員教授 木村 知義)

ドキュメンタリー制作、 日々格闘

経営情報学部 2年 渡辺 光

「あなたの言うことはわかるが、映像で撮られるのはちょっと…」

この1年半、何度この言葉を聞いただろうか。最初こそ、この言葉を聞くたびにえらく落ちこんだものだったが、最近ではこんなことに負けてはいられないと気持ちを切り替えられるようになった。そうは言っても、取材を断られるのは辛いものだ。

私は今、東日本大震災の被災地にかかわるビデオドキュメントの制作に取り組んでいる。主人公は私と同じ福島県出身の多摩大学の学生だ。彼女は3.11の日に実家に帰っていて津波で被災したが、ふるさとの復興に関わりたくて来年の4月から地元である相馬市で震災復興に関わる仕事に就くことが決まった。まだ放射能の問題も残る福島で、彼女が人生を賭けてふるさと相馬の復興めざす思いと、そこでの葛藤を描こうと思っている。しかし、これは私自身の生き方を問われるものでもある。ドキュメンタリーの制作とはそういう苦しみと格闘を乗り越えてはじめてできるのだということを制作の中で日々学んでいる。

こうしたビデオや音声メディアの作品の制作をめざすプロジェクトゼミ「メディアを創る」を私が志したのは、森達也さんという1人のドキュメンタリー作家の作品に影響されたからだ。森さんの作品は、ドキュメンタリーは作り手の主観によって構成されるものであり、ドキュメンタリーに絶対的事実はないという思想で制作されている。だから作り手のものの見方や考え方が問われるのだというのだ。森達也との出会いはとても衝撃的だった。そして、いつかはドキュメンタリーを作りたいと思うようになった。

見ている分には自分にもできそうだなと思ったドキュメンタリーの制作は思うようにはすまない。取材をお願いしたいと言っても、応じてくれる人はとても少ない。OKが出ても当日いざカメラを回そうとした時に断られることもしばしばだ。まだまだ終わりが見えそうにないが、これが私の作品だと言えるドキュメンタリーをつくるため、今日も格闘は続く。



津波で土台しか残っていない相馬市原釜地区(2012年8月)



時代の変化に適応する ロマンスカー

経営情報学部 2年 古西 政樹



7000形「LSE」



10000形「HiSE」



50000形「VSE」



60000形「MSE」

「小田急電鉄といえど？」と聞かれば、多くの人は、「ロマンスカー」と答えるのではないだろうか。小田急＝ロマンスカーが定着したのは、戦後に人気を博した新宿の映画館である「武蔵野館」であるといわれている。「ロマンスシート」と銘打たれたアバック向けの二人掛けのボックスシートのイメージが後の小田急が当時走らせていた特急のクロスシートと結びつき、小田急が自称する以前から「ロマンスカー」と呼ばれるようになった。それほどまでに、ロマンスカーは小田急電鉄の顔として、新宿から町田・小田原を経由し箱根登山鉄道と直通して、箱根湯本に向かう。都心を抜けて、田園風景に車窓が変化していく。この車窓からの変化を感じることができるのも、鉄道の旅ならではの。

ロマンスカーの初登場は1940年。小田急電鉄の前身である小田原急行が新宿と小田原をノンストップで結ぶ「週末温泉急行」が運行されたことがロマンスカーの原型とされている。その後、1942年に戦争による運転中止などがあったが、1948年に復活、翌1949年には週末のみの運転から毎日運転に変更された。それに合わせ、紅茶などの軽食を座席

まで運ぶ「シートサービス」が開始された。1963年には現在のロマンスカーの顔ともいえる先頭車両の運転席を上部に移し、前面をガラス張りにした展望席がある「NSE」が登場。

その後は1980年の7000形「LSE」、1987年の10000形「HiSE」などにも前面展望席が採用された。しかし、その後のJR東海 御殿場線直通車両の20000形「RSE」・通勤ビジネス輸送が主目的とされた30000形「EXE」には前面展望席は採用されなかった。これらは観光を目的としないことが主な目的となっているからである。

2004年には、白を基調としたロマンスカーの50000形「VSE」が登場し再び前面展望席は復活した。これは箱根への観光という原点に立ち返った結果であり、「箱根に向かう時からすでに観光が始まっており、その移動も観光の一部」という考えを体現したものだだろう。

展望席は通常の指定席料金で購入可能だが、座席数が少なく非常に競争率の高い座席といえる。私も乗車予約可能になる翌日に予約をしようと思ったが、すでに満席だったことが何度かある。それだけ人気の波は衰えていないといえる。

現在の最新型ロマンスカーは、2007年に登場した、青を基調とした60000形「MSE」で、こちらは東京メトロ千代田線の直通運転を考慮された車両である。先頭車両に避難用の貫通扉を設けているため、展望席ではないが、東京メトロ千代田線の北千住から箱根湯本を結ぶ新たなロマンスカーとして進化を遂げた。

ロマンスカーはただただ行楽特急車両として変化しただけではない。時代のニーズに合わせて、それぞれ目的をもって進化・改良されてきた。都心と郊外から箱根への観光、通勤輸送、他社相互乗り入れ、長距離輸送にあわせた多様なロマンスカーを運行することにより、人気の波を維持できるのだと私は思う。では小田急の顔であるロマンスカーはこれから、どのような進化・改良を重ねていくのだろうか。JR常磐線から箱根への直通。性能向上による時間短縮。車内設備の向上によるサービス向上。ロマンスカーへの夢や希望は広がるばかりである。